

ライラさんは将棋アイドルになります 4

「うーん」

三東はうなっていた。月子さんは、ロフトで執筆をしていた。棋書を出す予定なのである。

「うーん、やはりここは」

三東は頭を左右に振った後、すっと立ちあがった。月子さんと視線が同じ高さになる。

「どうしたんですか、先生」

「所属タレント三人、今後は社員も増えるかもしれない。ずっとここで仕事というわけにもいかないよね」

「まあ……そうかも……ですね」

「ちょうどいい物件を見つけたんだ」

「えっ、事務所のですか」

「事務所というか……」

「なんか、ちょっとわくわくしますね」

荷物を運びながら、ほたるははにかんだ。

310 プロダクションの新しい仕事部屋に、皆が集まっていた。

「ライラさんも楽しみでございますです」

ひょい、ひょい、とライラさんは小さい荷物を持って往復する。

「まあ、最初はこんなものかな。必要なものは買って
いかないと」

三東は新しいオフィスを前に、少し誇らしげだった。

「当たり前ですけど……同じですね……」

月子さんが、ロフトからひょいと顔を出す。

「ライラさんもそこに行ってみたいですねー」

「あ、私も……」

ライラさんとほたるが、梯子を上っていく。なんとなく嫌な予感のした三東が待ち構えていたが、予想通りほたるが上るときに運悪く梯子が倒れそうになった。三東が支えて、事なきを得た。

「あー、なんか落ち着きますです」

「そうですね……なんででしょう」

三人はロフトで寝ころびながら、にこにこしていた。

「うん、借りてよかった」

こうして、三東家の隣が新しい仕事場となったのであった。

いつもの闇指導イベントこと「将棋トークショー」だったが、三東は妙にそわそわしていた。今日の来場者は十人。ライラさんとほたるが少し話題になったこともあって、いつもより多い。ただ、三東のそわそわの原因はそこではなかった。

「あの子か」

「そうです、あの金髪の……」

客席には、とても目立つ女性がいた。とても短い髪は金色、耳にはいくつものピアス。明るい色のラフなシャツを着ていて、他の来場者からは明らかに浮いていた。

「二人の話す姿が……想像できませんね……」

月子さんの言葉に、ほたるは「えへへ」と言って照れた。金髪少女をここに連れてきたのは、ほたるなのである。

「桂馬さんはこうやって跳ねたいのでございますよー。でも戻れないのが困りましたですねー」

大盤の前ではライラさんが一人でしゃべっている。もともとおしゃべり好きで、その上将棋の上達も早く、見ていて飽きないということで二十分ぐらいを一人で回せるようになっていた。

「あの、私よく物が落ちてくるんです……歩いている

ときとか……」

「対局中に……駒台に飛車とか落ちてきたらいいですよね……」

月子さんとほたるが二人の時間は、独特の空気が流れる。何人か寝る。

「というわけで、今日はここまでです。ありがとうございました」

三東の言葉で、イベントは終わる。ただいつもと違い、彼は慌てて金髪少女の下に駆け寄った。

「ちょっといいかな」

「ん？ おお」

「君、名前は」

「アタシか？ アタシの名前は仙崎恵磨だよっ」

「せんぎき！」

三東は、拳を握り締めて震えた。

「さ、三東先生……？」

「強そうな名前だ。天才の香りがする」

「え、マジか。言われたことないけど、いやな気はしないかな」

「将棋は好き？」

「ああ、最近ハマっちゃってさ。今日も誘われてきたけど、おもしろいな！」

「そうか！ 君、アイドルにならないか！」

月子さんとほたるが、驚いて口をぼんやり開けた。
ライラさんはにこにこしている。

「ええっ、アタシをアイドルとしてスカウト？ マジ
でー？ アイドルってライブとかやったり、テレビと
か出れちゃう系？ プロと記念対局とかできちゃっ
たり？」

「そうだよ」

「あー、でもやっぱムリじゃね。アタシこんなんだ
よ？ アイドルってもっと清楚で可憐なカンジじゃ
ないとダメじゃん？」

「そんなことはない。名前がよくて、将棋が好きで…
…声が大きい。君はアイドルに向いてるよ」

「確かに、声が大きいのは取り柄かなって思うな」

「いいかい、君はきっアイドルになって輝いて、いつ
かプロと記念対局ができる」

「わかったよ！ そこまで言うならアタシ、その話、
ノった！」

こうして、310 プロ三人目の将棋アイドルが誕生し
た。

「ふふふ、待っていたよ。遅すぎたぐらいだよ」

三東プロの五人は、とあるスタジオに来ていた。とはいっても個人宅の中にあるものである。

「いや、ようやくメンバーがそろって」

「俺はつっこちゃん一人でもプロデュースできるよ？」

「あ、私……一人は……」

機材の前で、にこにこしている男。実は棋士、東尾七段であった。将棋界一の音楽好き、様々な楽器とパソコンを使いこなし、いくつもの楽曲をすでに発表していた。中でも将棋中継で使用される「トゥロトゥロ」というインストは、ダウンロード販売もされている。

「おー、すげー！」

恵磨は様々な楽器や、高そうなマイクを見てはしゃいでいた。

「これは、楽しそうでございます」

ライラさんは、部屋の隅にあるドラムセットに興味を示していた。

「おっ、ライラちゃん叩いてみるかい」

「いいのでございますか？」

「ああ、何なら叩きながら歌うのもありかもな」

「そんなことができるでございますか？」

「ウクライナ・モンテビデオとか、シシドウ・カスカとか、最近は結構いるよ。話題になるぞお」

「それよりさ、曲の方を」

「焦るな焦るな三東君。音楽は、テンションをあげていくのが楽しいんじゃないか」

「おお、わかるぞそれ！」

「わかるか恵磨ちゃん！ さすがだ」

それぞれ盛り上がるなか、ほたるは微妙な顔つきで立っていた。月子さんが近づき、小さな声で尋ねる。

「……どうしたんですか？ ほたるさんは、こういうの慣れているんでしょ？」

「あの……私……」

「ん？」

「実は……初めてなんです。事務所が倒産したりして、レッスン前にお仕事がなくなっていたので……」

「そうなんだ……じゃあ、みんな一緒ですね」

「えっ、あ、はい」

月子さんはほたるの表情が柔らかくなったのを確認して、今度は三東のほうに顔を向けた。

「あの、先生……本当に私も歌うんですか……？」

「もちろん。月子さんが、みんなを引っ張っていくんだ」

「大丈夫でしょうか……」

「大丈夫。なんとかなるものさ」

310 プロにアイドルが三人集まり、月子さんも加えて所属タレントは四人。そんな彼女たちは「四点リーダ」と名付けられ、ユニットとして始動したのであった。